日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）
映画上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き：大正期の映画・宗教・音楽」
傍聴記

山本　美紀

「映画上映とシンポジウム『甦る、琵琶映画の響き―近代日本の宗教・映画・音楽』」と題するイベントが、2023 年 12 月 11 日（月）18 時より、早稲田大学小野記念講堂で開催された。4 人の登壇者による第 1 部パネル「大正期の映画・宗教・音楽」と、弁士と生演奏による映画上映及び、岡田秀則氏（演劇博物館演劇映像学連携研究拠点：テーマ研究課題「「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究」研究代表者／国立映画アーカイブ）と共にパネルの登壇者弁士・演奏者によるトークの第 2 部「琵琶映画の『再現』上映とトーク」からなるイベントである。

岡田氏による開会あいさつから始まった第 1 部では研究の前提が説明された後、柴田康太郎氏（2023 年度「音楽関係学術イベント開催助成金」企画代表）から研究概要の説明と共に、4 人の登壇者それぞれが第 2 部で上映される映画と音楽について、その専門領域から光をあてる講演を行った。

最初の登壇者紙屋牧子氏（武蔵野美術大学）は、「映画『日蓮上人　龍ノ口法難』（1920 年）を考察する：聖地巡礼と〈奇跡〉の表象」として、第 2 部で上映される『日蓮聖人 龍乃口法難』（国立映画アーカイブ所蔵）をより楽しめるようにとの前置きの下、映画の見所を語った。紙屋氏によると、大正期には多くの日蓮に関する映画が製作されており、映画を製作した国際活映株式会社（国活）は海外へ紹介する意図を持っていたという。また、映画では伝承の奇跡物語を映画ならではの演出で表現されているだけでなく、富士山の絶景なども盛り込まれている。当時は、日蓮聖人にまつわる伝承を巡るツアーがあり、そのような観光に行いけないような人にも楽しめるような要素も映画に見られる。

2 番目の登壇者上田学氏（神戸学院大学）は、「日蓮主義宣伝映画と立正活映」と題し、大正期に宗教映画が多く制作された理由を巡って講演した。上田氏によると、そもそも映画と宗教は様々な形で関係があり、映画関係者の中に日蓮信仰や金剛教信仰などもつ者がいた。中でも牧野省三は 1921 年に「牧野教育映画」を立ち上げた際、仏教寺院からの依頼で仏教映画を多く手がけるなど、仏教各派より支援を受けた。仏教各派は牧野への支援を通じ、日本映画界を支えたといえる。さらに、近世以来寺社の境内で行われていた見世物小屋と映画館との関連性にも触れた上で、見世物性と宗教との関わりについて指摘した。

続いて薦田治子氏（武蔵野音楽大学）は「大正期の琵琶文化」と題し、琵琶音楽について語った。大正期は琵琶楽にとって、近代琵琶の最盛期にあたる。演奏者が増え、多くの流派が興り、楽器の改良も盛んに行われた。映画や演劇など他分野で琵琶楽が用いられるようになった背景には、このような琵琶楽の隆盛があったという。宗教と芸能は、どちらも人の心に直接働きかけるということで密接な関わりがあり、日蓮と近代琵琶との関連として、日蓮

にまつわる伝承が日本人好みであることから、映画までに既に 3 曲の琵琶楽があったことが報告された。さらに近代琵琶の作曲様式と共に、本日上映される映画で用いられる音楽の特徴、琵琶界の琵琶映画への受止めについても触れられた。

パネル最後、柴田氏による「映画琵琶台本と日本映画琵琶協会」は、映画館と琵琶との関わりとして歴史をふまえた上で、映画の琵琶台本について語られた。琵琶映画の上演では、クライマックスで弁士の反対側に琵琶奏者が出演していたことが伝えられている。無声映画による弁士の語りやライブパフォーマンスには様々なスタイルや変遷があるが、本日上演される『日蓮聖人 龍乃口法難』は、1 人の弁士が語り、囃子・鳴り物からなったと推測されている。その琵琶台本には裏表紙に「日本映画琵琶協会」とあり、当時はこのような協会が映画台本を管理していたという。台本は見開き 5 頁ほどに書込みがあり、今回のイベントでは映像と初めて照合されて上演が実現した。

5 分の休憩を挟んで第 2 部では、弁士の片岡一郎氏が下手に、琵琶奏者の川嶋信子氏（薩摩琵琶）と囃子方の堅田喜三代氏が上手に登場し、上映が開始された。先の柴田氏の講演では、今回の上映の工夫点として「映写速度の課題、手回しだった当時のように映写を調整できないため、奏者が合わせる」「映像が完全に残っているわけではなく、3 分の 2 程度であることから、途中で止めて琵琶の演奏で聴かせる（そこが聴き所でもある）」「弁士 1 名に鳴り物 2 名で構成」などが挙げられていたが、それらが苦肉の策としての手段だったとしても、十分当時の映画上映の様子はうかがえる内容であった。何より、弁士が語り、音楽が入ることで、群像劇の場面では注目すべき役者が、スポットライトが当たったかのように際立ち、目の前の白黒の世界が一気に活気づく感覚があった。

後のトークでは映像と合わせるための工夫をはじめ、川嶋氏からは「映像があることによって登場人物の気持ちに入っていくことができた」等、弁士・奏者それぞれの立場からの話があった。

今回のイベントは、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点 2023 年度テーマ研究「『映画館チラシ』を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究」の主催による成果発表である。映画琵琶台本については、現存する映像がほとんどない中で、今回は『日蓮上人 龍乃口法難』の映像と、琵琶台本が残っていた稀な事例として、再現が試みられたものである。そのため、本イベントでは、映画に出演していた澤村四郎五郎の縁者の方はじめ、会場に多くの人が来場し、短い時間ではあったが、充実した内容となった。